

朝鮮半島における日本語書店の展開

戦前外地の書物流通(1)

日比嘉高

✉ yshibi@lit.nagoya-u.ac.jp

This paper explores a history of book distribution in Japanese overseas territories before World War II, focusing on booksellers that sold books and magazines written in the Japanese language and the distribution system that circulated books and magazines between Japan and Korea. I outlined the history of book distribution in modern Japan and pointed out that Japanese bookstores in Korea essentially followed a similar historical pattern. In this paper, I especially noted upon the manner in which business was conducted between major booksellers in Korea and the Japanese distributors. I also examined in detail attempts to establish a distribution agency called Sen-pai (鮮配) in Korea. Next, I wrote a brief history of Japanese booksellers and their partner associations in Korea. I also discussed the increase in the number of booksellers in Korean peninsula from the 1900s to 1940s. Furthermore, I highlighted the situation before the establishment of the association of Japanese booksellers in Korea with particular focus on Nikkan-shobo (日韓書房). I also summarized the relationship between the expansion of the distribution system of government approved textbooks and development of leading local booksellers in Japan and its colonies. In addition, I outlined the history of Korean association of booksellers from their establishment to the end of World War II. In conclusion, I discussed the role of bookstores in Japanese overseas territories as the contact zone between two nations and ethnic groups.

Keywords booksellers(書店), Seoul(京城), distribution of books and magazines (書物流通), governmental distributing agency in Korea(鮮配), colonial Korea(植民地朝鮮)

1. 外地書店研究の価値

目下私は、戦前の外地で展開していた、日本語の書物を扱う小売書店に関心をもって調べている。小売書店、すなわち街で店を構え、本や雑誌を並べ、顧客たちにそれを売る本屋である。外地で日本語を扱っていた小売書店を、ここでは「日本語書店」と呼ぶことにする。

「本屋」については、これまでの文学研究や出版研究でももちろん関心を寄せられてきた。しかしその場合の「本屋」はほとんどの場合が出版社である。出版社に関心が持たれるのはわかりやすい。本がそこで作られ、社会へと出て行く起点だからである。これに対し、小売書店は、末端である。『本は流れる』という清水文吉の著作があるが¹、この比喩を借りれば、研究者たちは本の流れの上流には興味をもってきたが、下流あるいは河口には関心を寄せてこなかった。

しかし小売書店は面白い。その面白さ、重要さを、ここでは〈遭遇〉〈流通〉〈集蔵〉の三点から説明してみよう。小売書店は街に所在する末端であるがゆえに、人々が本に接する窓口となり、本を手取る人と人との出会いの場となる。特に外地における〈遭遇〉の場としての日本語書店の役割は、重層的である。それは日本民族と外地諸民族、内地在住者と外地在住者が、さまざまな組み合わせで出会う場であり、その彼らが種々の立場で日本語の書物と対話を始める場である。

たとえば上海の内山書店の例は著名だろう。内山完造の経営する内山書店は、日本人だけではなく魯迅や郭沫若、あるいは創造社のメンバーといった中国の文学者や若い政治運動家たちも集まる場であり、戦時下の日本人、中国人の出会いと対話の場となっていた²。

また、米国のシアトルに20世紀初頭から存在した三輪堂^{みつわどう}という書店には、シアトルに住む文学好きの日系移民たちが集まった。彼らは、三輪堂に本を買いに來たり立ち読みに來たりするだけでなく、集まった仲間同士で議論し、相談を行った。三輪堂は、シアトルにおける日系移民文学の揺籃のひとつであった³。こうした複数の意味とかたちをとりうる書店の空間を、私はMary Louise Prattの〈接触領域 contact zone〉という概念を使って説明した事がある⁴。

2点目は、〈流通〉である。小売書店を考える際に、私はそれを書物の流通の問題と組み合わせて考えている。人々が手取る書物は、いったいどこから、どのようにして

1 清水文吉『本は流れる——出版流通機構の成立史——』（東京：日本エディタースクール出版部，1991.12）。

2 内山書店については、たとえば太田尚樹『伝説の日中文化サロン上海・内山書店』（東京：平凡社，2009.9）、本庄豊『魯迅の愛した内山書店——上海雁ヶ音茶館をめぐる国際連帯の物語——』（京都：かもがわ出版，2014.2）を参照。

3 三輪堂については、竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』（シアトル：大北日報社，1929.7，p.589）、伊藤一男『続北米百年桜』（東京：北米百年桜実行委員会，1972.4，p.101）を参照。

4 日比嘉高「外地書店とリテラシーのゆくえ——第二次大戦前の組合史・書店史から考える——」（『日本文学』第62巻第1号，2013.1）。

やってきたのか、ということである。書物の流通が興味深いのは、それが国境さえ越えるトランスナショナルな広がりをもつ点にある。そもそも私がこの小売書店の問題に関心をもったのは、米国のサンフランシスコの日本人街における書店についてが最初だった⁵。なぜこれほどの量の書物が、これほどの頻度で20世紀の初頭から、海を渡っているのか。その問題を考えた時に、書物の流れを通じた、日米間の人と物と情報の流れ、そしてそれを支えた物質的な基盤の重要性に気づいた。そして、そうした人・物・情報を流通させる社会的な構造は、なにも日本と米国の間だけに広がっているのではない、ということにも思い当たった。要するに、本は東京や大阪などで多くつくられたが、近代の大量複製商品としてのそれは、日本の各地方に運ばれたことは言うに及ばず、ハワイにもサンフランシスコにもバンクーバーにもソウルにも台北にも上海にも大連にも樺太にもサンパウロにもシンガポールにも運ばれたのである。小売書店を考えることは、こうしたトランスナショナルな書物の流通と切り離せないし、切り離すべきではない。

3点目は〈集蔵〉である。書店の機能は書物を受け取り、送り出すだけではない。文字を記録した物体としての書物の、重要な機能の一つに時間的な持続がある。流通が空間を超えていく書物の役割を担うものだとすれば、集蔵は時間を超えていく書物の役割を支えるものである。書店には在庫がある。本を集め、分類し、並べ、客との出会いを準備する。品揃えが客を呼び、客を選び、本と人との遭遇の環境を作り、本を媒介にした人と人との出会いを用意する。

今回はこうした書店の機能のすべてを論じることは難しいため、朝鮮半島における小売書店の歴史と書籍雑誌取次のあり方を取り上げ、〈流通〉の歴史の一端に迫ろう。

2. 帝国の書物流通と朝鮮半島

第二次世界大戦以前における近代日本の書物流通は、明治から大正なかばにかけての、出版社と小売書店の直接取引(中間に都市部や地域の大規模小売書店の仲介が入ることもある)から、大手取次会社の成長と独占の拡大、そして国家による管理統制体制へ、という流れをたどる。特に雑誌は1910年代には大手取次による独占体制が完成し、東京堂や北隆館などといった大取次を介さないことには、販売そのものが不可能となっていく⁶。これに対し書籍は同様の取次を頂点とする流通のヒエラルキーが確立してはいくものの、中小の取次業者が生き残り、複雑な流通回路をもつに至った⁷。

5 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所——』(東京：新曜社、2014.2)、とりわけ第4章、第5章を参照。

6 『現代出版業大鑑』(東京：現代出版業大鑑刊行会、1935.8)所収の「日本雑誌協会史」を参照。

7 近代日本の書物流通については、たとえば橋本求『日本出版販売史』(東京：講談社、1964.1)、清水文吉『本は流れる』(前掲)、柴野京子『書棚と平台——出版流通というメディア——』(東京：弘文堂、2009.8)、柴野京子「解題」(『出版流通メディア資料集成——書籍雑誌業団体史編——』第1巻、石川：金沢文圃閣、2010.11)を参

1920年5月に全国書籍商組合聯合会が成立し、同業同士の過度の競争を防ぐことなどを目的として小売書店の組織化が進む。これを受けて朝鮮半島でも、1921年に朝鮮書籍商組合が成立する。この体制が確立して以降、組合員以外による内地刊行の新刊書籍雑誌の販売が困難になり、流通体制が固まっていく。

表1は、朝鮮半島に存在した日本語小売書店が、実際にどのような卸業者と取引をしていたかを一覧にしたものである。資料は後藤金壽編輯『全国書籍商総覧』（新聞之新聞社発行、1935年9月）を利用した。なお、この資料については朝鮮およびそれ以外の外地組合の取引について分析した別稿がある⁸。表1に掲載した書店は『全国書籍商総覧』において取引先について回答があった書店のみであり、網羅的なものではない。だが、一部ではあっても、1935年時点での書籍流通の輻輳したあり方を垣間見せてくれるだろう。

		国定教科書	中等教科書	新聞	古書	北高館	東京室	東海堂	大阪屋号	三省堂	日韓書房	博文館	文成堂	目黒	三宅	学研社	受戒研究所	日本出版社	南江堂	全原商店	大坪書店	林平	服部	駿々堂	田中宗久堂	盛松堂	柳原書店	大阪玉文館	松谷啓明堂	盛文館	菊竹金文堂	その他 の記述 あり		
京城	至誠堂				○		○		○																									
羅南	北光館	○	○				○				○																京城 出張所			○				
大邱	大橋書店		○				○																				大阪 /九州							
大邱	博進堂	○	○					○													○	○	○			○				○				
平壤	文祥堂書店	○	○				○		東京	大阪 支店							○		○				○			○								
大邱	大邱玉村書店	○	○	大毎			○																							○				
京城	以文堂	○	○				○		○	○	○																							
京城	日韓書房						○										○	○	○				○	○	○	○	○			○			○	
咸鏡北	会享 博文館	○	○																															
京城	開闢社																																	
釜山	呉竹堂					○																												○
京城	金剛堂 書店				○																													
釜山	広文堂	○					○			○	○						○	○					○											
羅南	田原 書店						○		東京																									
元山	大谷 屋善箱	○	○						東京、 京城																									○
京城	大阪屋 号書店	○	○			○	○		東京																									
平壤	中村 書店	○					○		○												○													○
釜山	三宅琢 造書店			○			○							○	○						○													○
新義	武藤 文具店						○														○					○								

照。

⁸ 日比嘉高「書店資料から読む外地の読者——『全国書籍商総覧』（1935年）を用いて——」（『芸術受容者の研究——観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動——』報告書，pp.54-60，日本学術振興会科学研究費補助金，課題番号20320028，研究代表者 五十殿利治）。

		国定教科書	中等教科書	新聞	古書	北斎館	東京堂	東海堂	大阪屋号	三省堂	日韓書房	博文館	文房堂	目黒	三宅	学書社	受談研究所	日本出版社	南江堂	全原商店	大坪書店	林平	服部	興々堂	田中宋栄堂	藤松堂	柳原書店	大阪堂文館	松谷政明堂	盛文館	菊竹金文堂	その他 の記述あり			
京城	文光堂		○		○																														
釜山	博文堂																																		
京城	丁字 屋書店				○																														
京城	東光堂 書店	○	○		○		○		東京、 京城																										
平壤	文鮮堂	○	○				○	○	東京	○	○	○			○												○		○						
平安北	斎藤 商店			○																															

[表1] 朝鮮半島の書店とその取引先

書店との取引数が多い取次業者を順にあげていけば、まず東京堂の圧倒的な存在感が目につく。東京堂は元取次の一社であり、かつ最大手だった。取引先を回答した書店のうち、半数以上の書店が東京堂との取引があったと答えている。次に来るのが、大阪屋号書店である。大阪屋号書店は外地取次の代表的会社として著名であるが、この資料でみる限り、取引先数では東京堂には及んでいなかったことがわかる。なお、朝鮮半島には大阪屋号書店の支店および卸部が京城にあった。朝鮮の書店のうち2軒は、東京の本店と、京城の支店の両方を回答している。

次に続くのが三省堂、大坪書店、柳原書店、盛文館で、それぞれ4-5軒の取引先を数えることができる。興味深いのは三省堂のような東京の大手(ただし大阪支店を回答している書店もある)以外に、佐賀の大坪書店、大阪の柳原書店、大阪の盛文館といった西日本の大手が数多く名前を連ねていることである。理由はむろん、地の利である。書物は嵩をはる。本の送料をだれがどう負担するのかは、遠隔地の書店にとって常に悩みの種だった。朝鮮半島により近い取次店が、より安い運賃で運べたことは当然である。

3. 書物配給会社「鮮配」の設立騒動

1938年夏頃、満洲国で一元的な書籍配給会社が設立されるという噂が流れ始めるが⁹、続いて、朝鮮においても同様の配給会社設立の動きが起こる。日本の業界紙『出版通信』の記事を追いかけるかぎり、最初に報道されたのは1939年4月10日で、朝鮮総督府より三橋警務局長の名で東京出版協会、日本雑誌協会、大取次に対し、公文書をもって協力参加の依頼が届いたという報道だった(同紙p.1)。同記事に紹介された「趣意書」は、その設置の目的を、内鮮一体観の徹底、日本精神の了解、朝鮮文化の啓発、朝鮮の皇国化とならんで、「時局下検閲の統制上の必要」と「朝鮮内に配給せらるゝ書籍雑誌の一元的統制」にあると謳っている。「一元的統制」は、具体的には「朝鮮総督府機関紙京城日報社を中心として東京出版協会、日本雑誌協会並従来朝鮮内に取引を有する書籍雑誌取次書店

⁹ 「満洲国に資本金二百万円の大配給会社を新設」(『出版通信』1938.8.5), p.4.

等を糾合し、茲に朝鮮書籍統制会社を組織し一切の中間営業の介在を廃」というものだった(同頁)。総督府からは古川図書課長が直接の担当者となって交渉に当たり、京城日報の東京支社が介在すると同時に、内地業者との仲介には博文館社長の大橋進一が当たった。

数度にわたる会見の報道のなかで、総督府当局においては「配給会社を作る最大の趣旨は検閲の徹底、定価販売の実行の二つ」¹⁰にあるということが明らかになるが、それにとまなうと予想された流通販売機構の大変革は、既存業者の猛反発を招いた。「朝鮮の皇国化」という題目には表だって反対は見られず、「検閲の徹底」についてもさほど大きな抵抗は示されなかった一方、既得権益に関わる部分——京城新報の販売店の小売参入や、取次業者の権益の収奪、外地の送料事情を無視した定価販売の目標など——に関しては、内地の取次業者たち、そして朝鮮の地元小売組合の抵抗は強硬だった¹¹。

両社の折り合いが付かないまま膠着状態に陥ったあと、朝鮮総督府は強行的な手段に出る。「現地業者は総督府にて官憲筋立会の下に賛成調印せしめ」、1939年8月28日「組合総会にて設立賛成可決」を行わせる¹²。その後、実行委員会が開催されたという報道があり、その委員名も報じられているが¹³、内地業者の協力が得られなかったためか、事態は停止する。この年末12月25日、満洲国においては満洲書籍配給株式会社が成立している¹⁴。

次に動きがあったのは、内地においても配給会社設立の計画が進み始めていた1940年11月だった。総督府から拓務省を通じて鮮配の創立について内地の配給会社創立委員会に申し入れが行われたが、内地に配給会社ができるのに、「同じ日本の朝鮮に別個の配給会社を作る事は重複であり無駄である、若し必要とあらば支店又は出張所を置くに如くはない」とされて却下されている¹⁵。結局、このとおり1941年5月には日配すなわち日本書籍配給株式会社が成立し、朝鮮半島における書物流通もこの国策配給会社の管理下に入ることになる。朝鮮半島に日配の支店が置かれたのは1942年2月11日、場所は大阪屋号書店京城卸部のあとで¹⁶、支店長は元取次の東海堂出身で前華中印書局常務取締役だった鈴木多三郎¹⁷、支店次長には「総督府警務局長の推薦により」¹⁸京城日報社の論説委

10 「古川課長と元取次会見」(『出版通信』1939.5.25)における古川の発言。

11 たとえば「現地業界の反対気勢蠢動 満鮮両配給会社案 具体化せば猛反対」、大阪屋号書店朝鮮卸部支配人島田宗一「止れ！三考せよ」(いずれも『出版通信』1939.4.20)。また「朝鮮組合の陳情団を迎へ卸業聯合の反対気勢揚る」(『出版通信』1939.5.5)、「鮮配問題 夫れぞれの立場と態度」(『出版通信』1939年5月15日)、「古川課長と元取次会見」(『出版通信』1939.5.25)など。

12 「地元征服に成功 鮮配案徐々動く」(『出版通信』1939.9.10)。

13 「鮮配実行委員会開く」(『出版通信』1939.9.25)。

14 満配については渡辺隆宏に次の論考がある。「周辺」の出版流通——満洲書籍配給株式会社設立への道程、大阪屋號書店その他——」(『メディア史研究』2010.3)、「満配問題——一九三九年、満洲書籍配給株式会社設立をめぐる——」(『メディア史研究』2011.2)、「満洲書籍配給株式会社設立の日とその前後」(『メディア史研究』2012.2)。

15 「鮮配問題再び台頭 結局朝鮮に配給支店設置か」(『出版通信』1939.11.22)。

16 「日配朝鮮支店開期」(『出版同盟新聞』1941.12.3)。

17 「日配朝鮮支店を開設 支店長に参与鈴木氏任命」(『出版同盟新聞』1941.10.28)。

員だった藤井安正がついた。

4. 朝鮮半島における書店数の変遷

ここからは、朝鮮半島の書店史を整理する。書店の数から、概観してみよう。1907年11月発行の『全国書籍商名簿』(東京書籍商組合事務所)に掲載された外地の書店は、樺太が1軒、台湾が12軒、清国が26軒、米国(バンクーバー、ハワイを含む)が32軒で、朝鮮(標記は「韓国」となっている)が22軒となっている。

朝鮮半島分の内訳を詳しく見てみると、京城が4軒。日韓書房(森山美夫)、盛文堂(店主名なし)の名前が見える。「京城王城前」にあったというこの盛文堂が、大阪の盛文堂と関係があったのかどうかは、まだ確認が取れていない。仁川港に2軒、釜山港には、博文堂(吉田市次郎)を含む2軒、鎮南浦に3軒、咸興府北道に2軒、木浦に2軒、大邱に2軒などである。すべて日本人、もしくは日本名を掲げた店主、店名のようなものである。

『大正十三年一月現在 全国書籍商組合員名簿』(全国書籍商組合联合会、1924年3月)では、朝鮮半島の組合員数は99である。地域別に見ると、京城24軒、平壤8軒、釜山4軒、大邱4軒などになっており、1907年から引き続いて経営しているのは、日韓書房(京城、岸本貫次郎)、博文堂(釜山、吉田市次郎)だけである。1924年の名簿で興味深いのは、地域的に書店の分布が広がっていること、内地書店の支店ができていること、そして朝鮮人の書店主が加入していることである。支店としては、たとえば大阪屋号書店(京城、内藤定一郎)、巖松堂京城店(新井武之輔)、巖松堂仁川店(菰淵紋七)などがある。朝鮮人の書店を見てみれば、光明書院(平壤、金燦斗)、東洋書院(京城、金相翼)を含む33の人名・名称がある(ちなみに同じ名簿の台湾には、浩然堂(台南)の黄欣、周文堂(台北)の周否、の2名が記載されている)。地域別に見れば、京城が8軒、次いで平壤5軒、黄海道3軒、咸鏡南道3軒などが多い。

京城の組合員である日本人の16店舗、朝鮮人の8店舗を地図上に展開してみると、やはり当時の京城市街がもっていた性格の通り、日本人書店と朝鮮人書店が明確に分かれる傾向にあったことが確認できる(図1)。だが、このことは二つ民族が〈書店〉という空間において交差しなかったことを意味するわけではない。このことは後に再論しよう。

18 「朝鮮支店開業」(『出版同盟新聞』1942.2.17)。

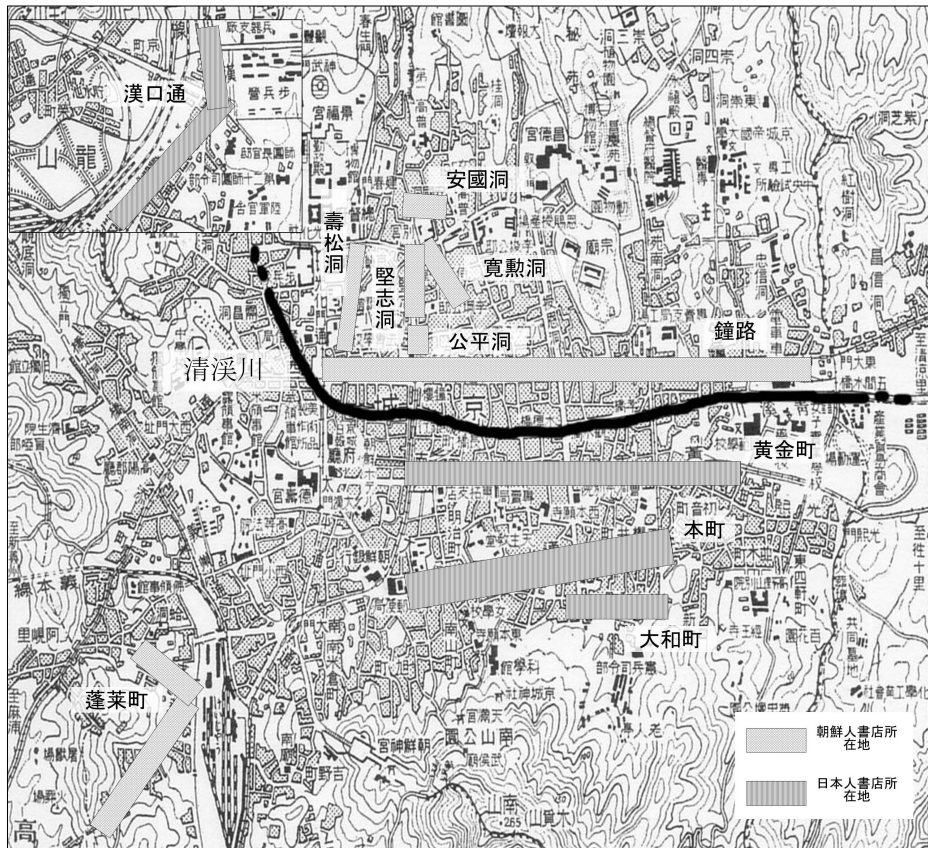


図1 1920~1930年代ごろの京城中心部における書店密集地域

次は、1938年3月刊行の『全国書籍業組合員名簿』(全国書籍業联合会編輯・発行)を見てみよう。掲載されている「朝鮮書籍商組合員」は全部で358名、名前から朝鮮人であると推定される組合員は、うち104名である。組合員の29%は朝鮮人だったということになる。「京城ノ部」に記載されたのは78店、うち朝鮮人の店主は以文堂の尹鍾眞、東光堂書店の李晶来など23人(29%)である。店舗所在地の住み分けは依然として根強く、わずかな例外——たとえば巖松堂京城店は鐘路にあり、安昌徳の文明堂書店は本町にあった——を除いて、日本人の書店は本町や黄金町、大和町などにあり、朝鮮人の書店は鐘路、寛勲町(洞)、安國町(洞)、堅志町(洞)などにあった。

以文堂とその店主韓慶錫については、1935年時の紹介が『全国書籍商総覧』にある。

株式会社以文堂 / 韓慶錫 / 【住】 京城府寛勲洞一三〇

[...]氏は明治三十二[1899]年八月二十一日京畿道金浦郡に生る、小学校を経て京城私立徽文義塾卒業(現在徽文高専校)更に京城YMCAにて英語を専修、昭和四[1929]年現業に着手す、以文堂は大正五、六[1916-7]年頃の創立にて同十四年現主がその代表

者となり(二百株所有)現在に至る、京城駅より三軒の地点にある朝鮮式二階建の広壮なる店舗にて東京堂、三省堂、日韓書房、大阪屋号と頻繁に取引を行ひ新刊書籍、雑誌、文具を日に四百余名に上る来客を迎へて店売[…](朝鮮pp.5-6./は原文改行)

日本語の書籍の取引先が明示されている一方、朝鮮語のそれについては言及がない。朝鮮語の書物をどのように扱っていたのかについては、今後の調査をまたねばならない。

5. 小売書店とその組合の略史1—組合以前と森山美夫の日韓書房

次は朝鮮半島における小売書店とその組合の歴史をたどる。小売書店の歴史を考える格好の資料として、書籍商組合の資料がある。組合員数のデータから書店の数を確かむことができるし、組合史が書かれていればその地域の書店の来歴を知ることができる。朝鮮半島の小売書店の組合は朝鮮書籍雑誌商組合である。前掲した『全国書籍商総覧』には関係者の筆によるとと思われる組合の紹介があるので、まずはこれにしたがって概略を整理しておこう。

記事は組合以前の状況から語りおこされている。1906年に「釜山に吉田博文堂が創設され、内地人書店の草分けを為した」こと。その後京城に日韓書房、うつぼや、大邱に玉村書店、平壤に文鮮堂などができたこと、「朝鮮三大書店の一つ大阪屋号書店」が1914年に創立されたこと、「更に古く明治二十五[1892]年会寧には小池奥吉氏によつて会寧博文館が創設されたが、地理的關係上前記書店ほどふるはなかつた」(朝鮮p.6)ことが書かれている。なお、「朝鮮三大書店」とは日韓書房、博文堂、大阪屋号書店のことだと考えられる。

この地域の草分けの一つ、日韓書房¹⁹の初期については、1913年に書かれた店主森山美夫の文章がある。少し長くなるが、当時の京城の読書事情をも物語る貴重な資料であるため、森山にしたがって追いかけてみよう。

私の朝鮮にやつて参つたのは、明治三十九[1906]年の九月であつた[。]その時分この京城に本屋といふのは、僅か二軒しかな[か]つた。これも実は名ばかりで、極めて微々たるもので、在京内地人の希望を満すような新刊書籍は殆どなく、今の古本屋のちよつと体裁のよきもの位で、その上、本の価はといふと、定価に郵税を附加するから、馬鹿／＼しき値段であつたのである[。]自分はこゝに本屋の仲間入りをすることになつた。勿論書籍は定価通りに願ひ、郵税附加などといふことはせなんだ²⁰。

19 日韓書房については、その書籍販売と出版について分析した以下の論文がある。신승모 「조선의 일본인 경영 서점에 관한 시론—일한서방(日韓書房)의 사례를 중심으로—」(『日語日文學研究』第79輯, 2011, 辛承模「朝鮮における日本人経営の書店に関する試論——日韓書房の事例を中心に——」).

同じ文章で森山は、創業当時においては、朝鮮人の需要は「日語学校の教科書位」でほとんど本屋とは没交渉であった一方、日本人は「無聊に苦しみ寂しさを訴ふるに拘はらず、娯楽機関など絶えてなかつた故」、店は「大に我内地人間に歓迎された」といい、一日の売上が「七百円位」になったこともあったと回顧する。

その後交通機関が発達し、内地人の移住者が増えたが、経済界の停滞もあって「開店当時の如き甘い事無く、平凡の感に堪へざる状況となつた」。ただし朝鮮人の日本語研究熱はさかんになり、小学校教科書や数学、物理学、法律書などの授業も次第に増し、「今日では朝鮮人は吾々の善きお得意となるに至つた」とい

う。日本人は「大体は東京あたりと変りがない」が、植民地の財政や地理、歴史、語学についてはよく売れる傾向がある。

雑誌類の売れ具合は非常によく、婦人や子供の読みものの売れ行きがいい。ただし、通常書店のお得意は書生であるはずだが、京城には中学生以上の書生がおらず、また若い官吏や社員も読書趣味に欠けているので、「京城の本屋は繁盛すると云ふても知れたもの」だ、と森山はいう。

なお、森山によればこのころ京城では「内地新聞も二日で見られる」流通の状況だったらしく、新しい出版物についても迅速に取り寄せたいものだと記事は結ばれている²¹。

日韓書房はこの後、大阪屋号書店と並ぶ京城の2大書肆の一つとなる。1935年時点の『全国書籍商総覧』の紹介では以下になっている。「日韓書房は日韓併合前東京森山同文館主の令弟[森山美夫]の創業に成り、大正三[1914]年其経営方を大阪の盛文館に譲り、故岸本栄七氏が店務を執掌し、同氏他界後昭和七[1932]年十一月には組織を資本金六万五千円の合資会社に改め徳力新太郎氏を支配人の椅子に据え、岸本氏が同店の代表社員となり、朝鮮に於て中等教科書、文部省教科書、総督府教科書販売に独自の地歩を築き、経営し来る、同店は本町通りに於ける最古の建築にして純日本建の店舗なり」(朝鮮pp.6-7)。

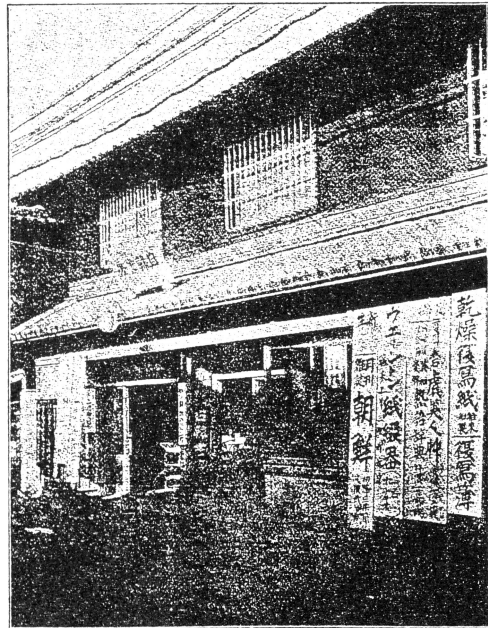


図2 日韓書房の外観 『朝鮮』1908年4月掲載広告より

20 森山美夫「朝鮮の出版及読書界」(『朝鮮』1913.4, p.166).

21 以上、森山「朝鮮の出版及読書界」、pp.166-167.

6. 小売書店とその組合の略史2－国定教科書配給と有力小売書店の成長

別稿でも触れたことがあるが、外地に限らず、日本の地方における有力書店の成長は小学校の国定教科書配給や、中学校などの教科書販売の請負と切り離せない²²。とりわけ、中央から地方の末端販売所への仲卸となる「特約販売所」の役割を担うことは、利潤の点においても、書店としての格の点においても重要だった。

朝鮮に国定教科書配給の歴史については、釜山博文堂主、吉田市次郎による「朝鮮に於ける国定教科書特約販売制の回顧録」という興味深い資料がある。もともと小冊子として配布されたものらしいが、『出版同盟新聞』1940年4月17日の記事「朝鮮国定販売制の創始」に紹介がある。これにしたがって、朝鮮半島における教科書配給と書店の歴史の出発点を見てみよう。

吉田の博文堂は1906年4月に釜山で開業している。「当時韓国の日本人小学校は京城を首とし釜山、仁川〔、〕元山、木浦其他を通じて二十校外外にして生徒数一万に充たず南鮮の大都市大邱に於てすら未だ其設置無く釜山小学校に使用する教科書は呉服商梅田某氏が学校の依頼により郷里の書店より譲受来り若干の送料を加へて恩恵的に販売」していた。吉田は、地元の小学校長から教科書の入手が不便であることを聞き、また朝鮮総監府設置以後小学校数が増えたこともあり、ここに商機を見いだした。日本で教科書配給を行っていた共同販売所の社主大橋新太郎(博文館)に、朝鮮における教科書配給の請負を打診する。当初は特別の契約を結ばず、注文を受けて送品する普通取引から始まったが、1910年の日韓併合を機に、吉田は特約販売所となる運動を活発化する。共同販売所へ詳細な報告書を提出し、朝鮮の各学務担当当局とも折衝をはじめ。吉田の運動は功を奏し、彼の提案した「京城、釜山二区域案」で配給計画がすすむことになる。京城側の特約店の候補は某雑貨店と日韓書房森山美夫だったが、吉田は業態から見て日韓書房を推薦したという。最終的には、1912年1月から、吉田の博文堂の受け持ちが「慶尚南北、全羅南北道、江原道、咸鏡南北の七道とし他の六道を日韓書房の受持となし特約販売契約を締結せらるゝに至」ったというのが、資料の語るその経緯である。

この国定教科書配給については『全国書籍商総覧』にも記事がある。1935年のようすが記述されているので紹介しておく。「現在では南北両鮮に分れ、南は吉田書店でうけ持ち慶尚南北、全羅南北、忠清南北及び江原道の一部に供給を行ひ、年額三万五千円と云はれてゐる。北は京城府国定教科書特約販売所で事務局を日韓書房内に置き、京畿、江原の一部、平安南北、咸鏡南北、黄海の七道に日韓書房、大阪屋号が七対三の割合に於いて配給してゐる。即ち出資金一百万円の中日韓書房が七千円、大阪屋号が三千円といった割合で、利益配当は三分である」(p.8)。北部地域では、日韓書房に加え大阪屋号書店が参加していることがわかる。

22 前掲、日比嘉高「外地書店とリテラシーのゆくえ」。

7. 小売書店とその組合の略史3—朝鮮書籍雑誌商組合の設立から終戦まで

朝鮮書籍雑誌商組合ができたのは1921年5月、割引競争による書店の疲弊を防ぐため、全国書籍商組合聯合会の「結成並びに勧誘に促され」²³で設立された。1928年10月、大邸の大橋書店が教科書の割引販売によって組合規約に違反した嫌疑にはじまり、さらに同店には雑誌の販売方法についても規約違反があったとされ、組合内で紛擾が起こった。これが引き金となり朝鮮半島の書籍業小売組合は、書籍・雑誌の2組合に分裂した。

『全国書籍商総覧』の朝鮮組合の記述には、1935年当時の書店の概況が示されている。

朝鮮業界の現勢を主要都市に就て見るに京城にては営業業績の顕著なる大阪屋号と店歴古き日韓書房を両雄とし、内藤氏、徳力氏共に業界に君臨、次で松野氏の金城堂、韓慶錫氏の以文堂は錚々たる書肆、古本屋には群書堂、文光堂、至誠堂、金剛堂等著名、洋書の丸善、堅実一点張の開闢社等名あり、平壤にては協坂文鮮堂群を抜き、中村書店、岡田文祥堂之に追隨し、大邸にては玉村、大橋、博信堂と三者鼎立、釜山にては博文館を尤なるものとし呉竹堂、三宅碌造本店の飛躍注目に値す、其他清津に中屋書店、羅南に大崎北光館、田原書店、元山に東書店、大谷書店書籍部、大田に鈴木書店[、]馬山に福屋、新義州に文明堂等著名なり(p.19)

有力な組合員を中心とした記述と見てよいだろう。

このあとの終戦にいたる内地も含めた業界の展開を、駆け足で見ておこう。小売組合も巻き込んだ重要な転機として、「鮮配」と称された書籍配給会社の設立騒動があるが、これについてはすでに述べた。大日本帝国が戦時体制に入っていく際に、出版、取次、用紙配給、小売、という出版界の四つの側面がそれぞれ、日本出版文化協会、日本出版配給株式会社、洋紙共販株式会社、書籍雑誌小売商業組合という国家が主導する戦時体制へと変貌していく。

書籍雑誌小売商業組合が各地で結成されはじめたのは、1942年頃からである²⁴。最終的には1944年に、日配はさらに日本出版配給統制株式会社となり、各都道府県の書籍雑誌小売商業組合は出版物小売統制組合へとなった(前掲『日配時代史』)。国防経済の計画的遂行を担うための統制強化措置であり、これが戦前期の出版体制の終着点であった。

8. おわりに——〈接触領域contact zone〉としての書店

最後に、朝鮮半島における小売書店の問題を、〈接触領域〉という観点から整理し直してみよう。

²³ 『全国書籍商総覧』(朝鮮), p.6.

²⁴ 清水文吉『資料年表 日配時代史——現代出版流通の原点——』(東京: 出版ニュース社, 1980.10)、特に年表参照。

書店という空間は、たんなる本の販売場所ではない。そもそも、京城の書店の立地が物語っていたように、それがどこにあるのか、ということ自体が、民族によって色分けされる都市の住まい方や、資本の多寡の影響を受けずにいない。個々の書店の営業は、書店主の裁量にももちろん任されていたが、仕入れは取次の流通網のあり方に規定されていたし、場合によっては系列店の方針が強固に存在したりもした。価格や販売方法に関する重要な点は、組合という組織をつうじて内地の業界団体の方針にしたがっていた。書店史を調べていくと、街の小さな書店がいかなる権力的な網の目の中に存在していたのかが、見えてくる。その編み目は、帝国日本が戦時体制に入るにしたがい、次第に国策的な色彩を強くしていく。

書店に関わる人々は、民族的な軋轢や、業界内の駆け引き、国策による指導、利潤の追求、娯楽の楽しみ、知識欲など、さまざまな要因によってその振る舞いを複雑に規定されていたといえるだろう。たとえば、朝鮮半島の日本語書店の書店主には、日本人と朝鮮人がいたが、彼らが売った雑誌がたとえ同一のものであったとしても、その意味するところは同じではないだろう。日本人が本町で『改造』を買うことと、朝鮮人が鐘路で『改造』を買うのとは、やはり意味が異なったというべきであるし、販売した店主が日本人であったのか、朝鮮人であったのか、応対した店員が日本人だったのか、朝鮮人だったのかも、決して無意味な細部だとはいえないのである。

書店は本に出会う場であり、人に出会う場である。書店という空間がいかなる性格の場としてあったのか、そしてそこにおいてどのような必然的/偶発的な邂逅があったのか、それを考えることが書店研究の面白さだ。この問題はより具体的に、個別の書店、個別の出版物、個別の書店主、顧客＝読者の場合に応じて、今後追求されねばならない。

その際、私が重要だと考えているのは、日本語の空間の向こうに広がっていた朝鮮語の空間であり、そこに生きる人々の経験である。語学と専門領域の問題をはじめとした能力の制約があり、私の研究はどうしても日本語を中心とした、日本人の視点からのものとなる。それは京城という場でいえば、本町や大和町、黄金町を中心に考えてしまうということだ。おそらく、これは韓国における出版文化研究についても程度の差はあれ、同じだろう。鐘路や寛勳洞を起点に見る世界だけでは、第二次世界大戦以前のソウルの書店文化は語れまい。

さらにいえば、日本語と朝鮮語の空間だけでも不足だろう。書物は、やすやすと国境を越え、そしてそこに留まり、長く周囲に影響を与える。京城帝国大学法学部の奥平武彦に「京城の書肆」という文章がある²⁵。奥平はこの文章で四種類の書籍について言及している。朝鮮の古典籍、日本語の新刊書籍、洋書、そして現代の古書である。後者三つについて紹介し、この論考を閉じることとしよう。

²⁵ 帝国大学新聞社編『文化と大学——法学随想——』（東京：帝国大学新聞社出版部，1935.6）。同資料については「古本おもしろがりずむ：一名・書物蔵」<http://d.hatena.ne.jp/shomotsubugyo/20130719/p1>に教示を得た。

大学が出来てから店頭で學術書がならぶやうになつたと、いふことを聞くこともある。新刊書肆といへばまづ大阪屋号と日韓書房。恐らくこの両店の仕入部が怠るのであらうが今でも新刊書は特に注文して取寄せねばならぬことが多い。定価の六分を郵税として附加されてゐたのが内地なみに定価販売となつたのがついこの間のことである。新時代の文化の建設には新刊書肆も丸善出張所もまだ／＼活躍せねばならぬ。古本屋といへば本町筋に八九軒、しかし亜細亜協会朝鮮支部雑誌を始め京城で刊行された洋書など一冊とてこゝで見つかるものでない。(p.210)

奥平は続けて、1927年の春頃に、朝鮮の税関局に長くつとめたマクレヴィ・ブラウンの蔵書が「洪水のように溢れた」ことを回想する。「モリソンの英華辞典を始めメドハースト、エドキンス等の東洋関係書と、彼の教養の一面を示すペイターのリネツサンス、テニソンやブラウニングの詩集(いずれも初版本)など。やつと買ひ集めて六百三十三冊だけが大学図書館に入つた」(p.211)。そして最後に、現代京城の古書店のようすを描写する。

鐘路以北に朝鮮人の古書肆が十軒あまりもある。こゝにも嘗ては東洋関係或は旧税関関係の洋書に面白いものがあつたが、近来は共產主義のパンフレットの類がどの書架にも目白押しならんである。朝鮮の青年諸君の思想はと尋ねる人には、朝鮮古本屋の一巡を勧めることにしてゐる。新旧の文化が京城では渦巻いて潮流の行方をつかむことは難しいが、書籍の働きかける役割がこゝではどこよりも大きいであらう。(p.211)

帝国の書店論は、複数言語、複数民族の接触領域として書かれねばならない。奥平が1930年代の京城に見て取つたように、「書物の働きかける役割」は国境や言語を超えて機能する。そして書店は、書物の機能の場そのものである。

参考文献

- 伊藤一男(1972)『続北米百年桜』東京：北米百年桜実行委員会。
太田尚樹(2008)『伝説の日中文化サロン上海・内山書店』東京：平凡社。
現代出版業大鑑刊行会(1935)『現代出版業大鑑』東京：現代出版業大鑑刊行会。
清水文吉(1980)『資料年表・日配時代史——現代出版流通の原点——』東京：出版ニュース社。
清水文吉(1991)『本は流れる——出版流通機構の成立史——』東京：日本エディタースクール出版部。
柴野京子(2009)『書棚と平台——出版流通というメディア——』東京：弘文堂。
竹内幸次郎(1929)『米国西北部日本移民史』シアトル：大北日報社。
本庄豊(2014)『魯迅の愛した内山書店——上海雁ヶ音茶館をめぐる国際連帯の物語——』京都：かもがわ出版。
日比嘉高(2008)『北米日系移民と日本書店——サンフランシスコを中心に——』(『立命館言語文化研究』20巻1号)。
日比嘉高(2011)『書店資料から読む外地の読者——『全国書籍商総覧』(1935年)を用いて——』(『芸術受容者

- の研究——観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動——』報告書。日本学術振興会科学研究費補助金。課題番号20320028。研究代表者 五十殿利治。
- 日比嘉高(2013)『外地書店とリテラシーのゆくえ——第二次大戦前の組合史・書店史から考える——』(『日本文学』第62巻第1号)。
- 日比嘉高(2014)『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所——』東京：新曜社。
- 渡辺隆宏(2010)『「周辺」の出版流通——満洲書籍配給株式会社設立への道程、大阪屋號書店その他——』(『メディア史研究』。27号)。
- 渡辺隆宏(2011)『満配問題——一九三九年、満洲書籍配給株式会社設立をめぐって——』(『メディア史研究』29号)。
- 渡辺隆宏(2012)『満洲書籍配給株式会社設立の日とその前後』(『メディア史研究』31号)。
- Pratt, Mary Louise.(1992) *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.
- 신승모(2011)『조선의 일본인 경영 서점에 관한 시론—일한서방(日韓書房)의 사례를 중심으로—』(『日語日文學研究』第79輯)。

日比嘉高 Yoshitaka HIBI

(日本)名古屋大学大学院文学研究科。准教授。近現代日本文学、移民文学、戦前外地における書物流通、現代日本のトランスナショナル文学など。『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所』(東京：新曜社、2014)、『〈自己表象〉の文学史——自分を書く小説の登場』(東京：翰林書房、2002)、『外地書店とリテラシーのゆくえ——第二次大戦前の組合史・書店史から考える』(『日本文学』東京：日本文学協会、第62巻第1号、2013)。